

審査の結果の要旨

氏名 菅沼 慎一郎

何らかの課題に直面して諦めざるを得ない状況に陥り、その経験が精神的健康に影響を及ぼすことはよく見られる。ところが、諦めることに関しては、心理学的観点からの一貫した定義はなく、実証的研究も少ない。そこで本論文は、諦めることを定義した上で、その体験プロセスと機能を明らかにし、精神的健康を促進あるいは阻害する要因を検討することを目的とした。論文は、先行研究をレビューして研究の課題を明らかにする第1部、諦めることの体験のあり方を質的に研究する第2部、諦めることの一般的認知と精神的健康との関連を量的に研究する第3部、諦め体験に対する意味づけと精神的健康との関連を量的に研究する第4部、結果を総合し、臨床心理学的介入の可能性を検討する第5部から構成される。

第1部1章では精神的健康とライフサイクルの観点から諦めることの意味を検討、2章で先行研究が諦めることの精神的健康へのネガティブ要因の検討に限られていることを明らかにし、青年期の諦め体験における建設的な要因を検討するという本研究の目的を示した。

第2部では後青年期（22-30歳）の男女15名の面接データの質的分析結果に基づき、3章で諦めることの構成要素を「諦めた内容」「諦めたきっかけ」「諦め方」と同定し、諦めることを「自らの目標の達成もしくは望みの実現が困難であるとの認識をきっかけとし、その目標や望みを放棄すること」と定義した。4章では諦めるプロセスを「未練型」「割り切り型」「再選択型」に分類、それぞれの体験モデルを生成し、諦める行動の背景には実現欲求低下を中心としたプロセスがあり、それが建設的な諦めと関連していることを明らかにした。

第3部では、5章で大学生434名を対象として「諦めることに対する一般的認知尺度」（以下認知尺度）を作成し、一般的認知は「有意味性認知」と「挫折認知」で構成され、性差が存在することを明らかにした。6章では大学生600名を対象とし、認知尺度を用いて精神的健康との関連を検討した結果、諦めることの認知は時間的展望を介して精神的健康に影響を及ぼすこと、女性にとって有意味性認知の重要性が男性に比して高いことを明らかにした。

第4部では7章で、過去に重要な諦め体験をした青年期600名（男女同数、平均21歳）を対象として「特定の諦め体験に対する意味づけ尺度」（以下意味づけ尺度）を作成し、意味づけは環境、行動、認知要因によって変動すること、共分散構造分析によって時間的展望を介して精神的健康に影響を及ぼすことを明らかにした。8章では、意味づけ尺度を過去に重要な諦め体験をした成人期前期600名（男女同数、平均31歳）に実施し、7章と同様に意味づけは時間的展望を介して精神的健康に影響を及ぼすことを確認した。しかし、成人期前期では、有意味性認知から時間的展望へのパスに男女間で有意差が見られ、女性は男性とは異なり有意味性認知の重要性が成人期前期に大きく低下することを明らかにした。

第5部では全体の総括を行うとともに、研究成果にICTを応用して開発した諦めアプリケーションを示し、臨床心理学的支援の新たな可能性を提案した。本論文は、実証的研究によって諦めることの構造とプロセスを明らかにした上で時間的展望を介する精神的健康への影響における性差の存在を指摘し、臨床的介入の方向性を示した点で特に意義が認められる。よって、本論文は、博士（教育学）の学位を授与するに相応しいものと判断された。